



自分の感覚を大切に、 目の前の子どもを見て 指導すること

文 | toshi
イラスト | 秋野 純子



先日、五年生担任の新米先生が愚痴をこぼしていました。

「国語の、『資料を用いた文章の効果を考え、それを生かして書こう』の単元なんですけれど、資料を生かすも何も、それ以前の資料の読み取りすら困難な子がいるのですよ」

さもありません。私はそう思いました。「案ずることはないよ。そういう子どもの実態はどのクラスでも見られるのではないかな。だいたいそういう単元を設けること自体に問題があるのだ」

どんな資料が見ると、「ごみの総排出量の推移」、「平日の生活時間」といったような図表、グラフが四点でした。これは社会科の学習に関連するものばかりではないか。私はそう思いました。ですが国語としては、「資料から分かる事実と、そこから考えられることを書き出し、自分の考えを文章に書こう」というのです。

さあ、大変です。資料から分かる事

実とか、そこから考えられることとか
いっても、そもそも資料の読み取り自
体が困難というのですからね。国語以
前の問題です。

○資料の読み取りが困難な理由は

私の担任時代には、こうした単元は
ありませんでした。どう学習していた
かというと、資料は社会科のごみの学
習の中で、「ごみが多すぎる」とか、「そ
れはわたしたちの生活に問題があるの
ではないか」などといった問題意識が
生まれ、それを解決するために用意さ
れるものでした。切実感があれば、子
どもが資料を持ち寄ることもありまし
た。

現在の国語では、冒頭の単元名のも
と唐突に資料が示されるのですから、
子どもの学ぶ姿勢に雲泥の差が生まれ
るのは、当然ではないでしょうか。

資料の読み取り困難の理由としては、
・社会科や算数科の中で今まさに学習
している内容であること、したがって
て事実をもとに文章を書く以前に、
事実の把握そのものが大事な学習内
容であるといえること。

・問題提起の仕方が唐突で、子どもた
ちにはまだ何の問題意識もないため、
資料を読もうとする意欲も乏しく、
まして文章を書く必然性もないと考
えられること。

などがあげられるでしょう。

子どもと動き回れる。子どもと感覚がぴったり合う。

それは子どもたちにとって最大の魅力。

「さあ！その若さという武器を最大限発揮しよう」

toshi 先生から新米先生へのエールです。

< toshi 先生プロフィール >

子どもたちと存分に遊んだ新任時代。日々子どもたちの思考の筋道を大切に、授業で子どもをどう生かすかを考える一方で、学級経営や児童理解のあり方に頭を悩ませた修行時代。子ども第一の学校経営を考えてきた校長時代。35年の教員生活を経て、現在は小学校の初任者指導にあたっている。「ある退職校長の想い」「小学校初任者のブログ」を執筆中。

○学習内容はなぜ変わったのか

それにしても、どうしてこのような単元が生まれたのでしょうか。

これまでは知識・技能の画一化にとどまったものが、今は学び方まで画一化しようとしています。昔から、「子どもの個性を大切に」といわれます。そして現在、子どもの個性を尊重することは社会全体で強調されることもめずらしくありません。ところが学校教育はどうもその逆をいつているようです。

先述の問題にしても、以前は、「ごみはなぜ増えるのだろう。ごみを減らしたい」という問題意識のもと、子どもたちは、いろいろな資料を持ち寄りました。資料の読み取りが得意な子は、図表やグラフなどの統計資料をもとにしましたし、ごみ置き場の写真を撮影して持ってくる子もいました。また大人にインタビューし、考えを知ろうとする子もいました。以前はそうした多様な学びをしていたのです。そして、互いの資料を見合い、考えを出し合いながら、考えを深めていきました。そして、解決せざるはられないといった切実感、学びの必然性のもと、統計図表を読み取る力も身につけていきました。

今の国語のように、一斉に統計図表を読み取りましょうという学習は基本的にはなかったのです。

○子どもの個性を伸ばす指導法とは

さて、それでは、今の国語の中でも、子どもの個性を大切に、伸ばす指導はできないでしょうか。

それには、まず一人ひとりの子どもの学力を把握することが大切です。一口に統計図表の読み取りができないといっても、その力は「タイトルは読める」「多い、少ないといった量の違いは読み取れる」「数量の変化やその様子までは読み取れるが、二つの量の対応、比較まではできない」など、多様なはずです。

そうした把握ができれば、次に、一人ひとりの子が本時授業の中で、何か一つでも身につけたものがあつたか、あればよしとする、そんな指導観、学力観をもつことが大切です。

本時目標は当然大切なものです。しかし、それは学級の目標として大切なのです。全体としてのねらいと、一人ひとりのねらいは別。そうした柔軟性をもつてほしいと思います。

ある道徳の授業でした。勝海舟の少年時代の話でした。ほしい本をお金持ちに買われてしまった海舟は、そのお金持ちの家に通つてとうとうその本を全部写し取りました。

この授業のねらいは「不撓不屈」で



した。それは達成しましたが、一人の子が最後に、「海舟はえらい。……。ぼくはこんな暗い夜道を一人でずっと通い続けることはこわくてできない」と発言しました。この子は授業のねらいを「勇気」としてとらえたのです。その子の個性を把握している担任は、本時のねらいは達成しているとみて、よしとしました。

冒頭の「新米先生には、そんな話をしました。新米先生は少し明るい表情になりました。しかし、資料の読み取りができない子が多いとなれば、話は別です。それでは本時のねらいに無理があるとなりそうです。そして、もう一言言わせてもらえば、学習指導要領など、教科間の連携がとれているのか、気になります。算数科でグラフ、図表を入門的に学んでいる最中なのに、国語で二つの量の変化を一つに重ねたグラフを載せるなど、ちよつと疑問があります。